彼は、顔に切り傷のある部族なの。あんたたちは彼を捨てたの。彼は飢えた部族なの。失恋して行き場所がなくなった、やさしい暴君なの。

娘が僕の腕のなかで眠っている。髭を剃っていない僕の頬におまえの暖かい手。

僕の腕のなかで子供がまた眠りにおちる。僕は彼女の睫を見る、一部が汗でぬれている、広い額に汗が広がっている。頭部の青い静脈が、平和に脈打っている。

彼女は眠っている。

身動きしない旅人、僕は一晩ここに落ち着くことにする。すべてがよみがえる。はてしない野原ですごした子供時代。あのときのママはとてもやさしかった。それから、カメラマンのパパ。幸せにみちた体の忘れられないシルエット、あたり一面夏の太陽に輝いていた。白いシーツの上に、露でくもったグラスが一つ。そこで、女たちの丸い腰が帆を張っていた！好色な女たちが僕のベッドをいっぱいにし、小さくあえいでだらだらすごし、その後、足が一本やさしく開かれ、ちょうどそのとき、シーツにしわが寄り、女たちの熱気に負けてしわくちゃになる。半開きの窓から、遠くの町の騒音と、新しいお祭り騒ぎが聞こえた。

僕はまた起きあがる。横になったままではどうもおれない。僕はインスタントのバーミセ